

令和6年度第2回対馬市海岸漂着物対策推進協議会 議事録
(令和6年度対馬市海岸漂着物対策事業中間支援業務)

1. 会議日時：2024年（令和6年）11月18日（月）14：30～17：00
2. 会議場所：対馬市交流センター4階視聴覚室
3. 出席者：

委員	清野委員長、中山委員、小島(あ)委員、橘委員、犬束委員、尾上委員(オンライン)、赤澤委員(オンライン)、小島(博)委員、財部委員、村井委員（順不同）
事務局	【対馬市市民生活部環境政策課】 阿比留正臣課長、福島課長補佐
運営	【一般社団法人対馬 CAPP（以下、CAPP と略す）】 上野芳喜、末永通尚、吉野志帆、原田昭彦、山内輝幸、波田あかね、佐々木達也

(欠席：山本委員、川口委員、宮崎委員、村上委員、神尾委員、(順不同))

1. 議事録

注：

- ・ 「えー、あの、えっと」などの文脈において意味をなさない単語、および、言い直した発言については記載していない。明らかな間違いのある発言や口語表現については、適宜修正している。
- ・ 発言者は赤文字で示し、発言の補足は（かっこ書き）にて示している。
- ・ 質問時の委員の挙手動作およびそれに伴う委員長の指名発言は、議事録修正時に削除している。
- ・ 発言の趣旨が変わらない程度に、適宜語順を入れ替えている。

事務局(福島)：皆さまお疲れ様です。それでは定刻となりましたので令和6年度第2回対馬市海岸漂着物対策推進協議会を開催いたします。まず始めに、事務局の環境政策課長阿比留より一言ご挨拶を申し上げます。

事務局(阿比留)：皆様こんにちは。環境政策課長の阿比留でございます。本日はお忙しい中、ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。さて、昨年位からですね、全国の自治体や議会からの海岸漂着物に関する視察受け入れが非常に増えております。沖縄県ですね、県議団、京丹後市議団、長崎県の県議団、県下の副市長会、それから環境省の滝沢副大臣、佐賀県庁、小値賀町、それから韓国のコサン市からもですね来ていただいております、明後日にはですね、熊本県議団も27名来ていただくような事になっております。お陰さまを持ちましてですね、対馬市の漂着ごみの取り組みが先進的であるという事の証左ではないでしょうか。本日の議事内容もですね、只今ご紹介をいたしました視察も含めて、環境ス

タディツアーに関する内容となっております。漂着ごみの現状を目の当たりにしていただいて、回収作業もセットです。海ごみに関するデータや状況、そして本市が取り組んでおります事業を学んでいただくと同時に、対馬市の歴史とか文化とか、アクティビティとか食とか、そういった対馬市の持つコンテンツと一緒にですね、楽しんでいただくというツアーとなっております。対馬に来ていただく大きな動機付けになっているものでございます。本日はその様な、様々な情報発信も含めて、皆さまの忌憚ないご意見をいただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。以上でございます。

事務局(福島)：ありがとうございました。それでは議事を進めさせていただきたいと思えます。議長を委員長であります、清野委員長様をお願いしたいと思えますので、ここからの進行をよろしくお願いいたします。

清野委員長：ありがとうございます。九州大学の清野でございます。この重要な会の委員長を仰せつかっておりますが、中々十分でないところもございまして、皆さまどうぞよろしくお願いいたします。早速ですが、今年度に入りまして第2回の協議会となります。その中で今までですね、調査報告をいただくのが多かったんですけども、今回に関しましては特に今阿比留課長からお話がありました様な、環境スタディという事で島内の方、島外の方が海ごみを巡って学ぶ場を提供し、それをお伝えするのも自分達の実践を通じて感じた事、そして提案も社会に対してなさっているという事でございます。今日の議事の大半はですね、そういった形で拾うだけではなくてその発生抑制であるとか、あるいは社会を改善していく、新しい社会を構築するための対馬の活動についてお話をいただく予定でございます。それでは早速ではございますが、議事に入らせていただきます。今日は出席されている皆様、前回既にお顔合わせいただいておりますがよろしいでしょうか。それでは早速、議事に入らせていただきたいと思えます。それでは1番目、令和6年環境スタディ受け入れ報告をお願いいたします。

運営(末永)：令和6年度環境スタディ受け入れ報告について発表をさせていただきます。資料1、ページで言いますと2ページをご覧ください。環境スタディというものでよく言葉ではですね、最近遣わせていただいているんですけども、もう一度弊社がっております環境スタディについて、どういった事をやっているのかという事で、具体的に説明をさせていただきます。

清野委員長：失礼しました。話していただく方のお名前を私が紹介すべきでございました。ではよろしくお願いいたします。対馬 CAPP の末永様よりお願いいたします。

運営(末永)：対馬 CAPP の末永と申します。よろしくお願いいたします。環境スタディについ

て具体的にまずおさらいと言いますか、分かりやすく説明をさせていただきたいと思えます。環境スタディの内容につきましては、5つのものがございます。1つ目は海ごみ授業です。海ごみ授業は、対馬 CAPP の活動の内容、それから対馬に海ごみが大量に漂着する要因、対馬の海ごみの特徴、それから対馬市全体としての取り組みですとか、そういったものについてワンパッケージで1つの授業という風にさせていただいております。それから今年の4月からですね、新たに発生した内容といたしまして、対馬クリーンセンター中部中継所の説明というものがございます。これは対馬市の方が今、リサイクル等に力を入れておられて、そういった視察のお客様が多いものですから、実際に平成30年ですね、第1回の対馬市海岸漂着物対策推進協議会で、発泡ブイ、プラスチック類のリサイクルという事について議論がなされまして、発泡ブイの圧縮ペレット化の加工装置、それからプラスチック破砕機、ボイラーの導入という事でセットで考えて対馬市長様の方に、本委員会の当時委員長でありました糸山委員長の方から、提言という事でさせていただいた実際の結果としてですね。その後導入された株式会社エルコム社の設備の説明、それから対馬市のリサイクルへの取り組みを実際に現地の機械とかですね、実際にどういった海洋ごみをどの様な形でリサイクルしているかという事について、実際のものを見てもらって現物の前で説明をさせていただいております。それから、弊社が任意団体の頃から続けております海岸清掃。これにつきましては、参加団体の目的ですね。それからその他要因、その他要因というのは具体的に申し上げますと、例えばご年配の方が多くてあまり足場が悪い所は難しいとか、後、子どもさんが多くて危険な場所では難しい。そういった様な実際に海岸清掃に来られるですね人の特徴と言いますか、それを考慮して差別ではないんですけども、そういう形で、その方々に合ったですね海岸を提供させていただいて、色々ですね保険等も含めこちらの方でご準備をさせていただいて。ただ拾うだけではなくてごみの種類とかですね、こういったごみが多いとか現地でももちろん説明をしながら海岸清掃というのを行っております。それから海岸視察ですね。これにつきましては人数があまりにも少なくですね、ちょっと海岸清掃するにはという様な少人数の場合につきましては、海岸を実際に見ていただいております。それから天候が非常に悪くてですね、小雨位では海岸清掃というのは実施するんですけども、やはり風が強すぎたりとか、大時化の時とかですね対馬の海は危ないので、そういった時は遠目からですね、海岸を視察という事に切り替えたりという事で海岸視察というものがございます。それからこれが弊社の特徴的な部分でございまして、シーカヤックの体験というのを付けております。今までは海岸ですね、海ごみのところについて中心的に話してきたんですが、こちらにつきましてもですね、美しい対馬の海の自然をですね体感しながら、無人島に上陸するコースというのをやっております。基本的によく見ないとですね、対馬の海はすごくきれいで、そんなにごみが浅茅湾内に落ちている様な感じはしないんですけども、実際にそういった無人島とかに着くとですね、やはり外国のごみがペットボトルにはなると思うんですが、ありましたり、後、ブイがありましたり。そういったちょっと気づけばですね、そういったものを見つける、見かけるという事になります。美しい海

を体験しながらも、海ごみについてそういったところで学習をしていただくというツアーを行っております。これは以前のですね委員長でした、糸山委員長が言葉として残されている「捨てる人は捨てるな」という精神で、カヤックですからそんなにいっぱいのごみは積み込めはしないんですけれども、1つでも良いので拾ってきていただいて、こちらで処分させていただくという様な形で、海岸の清掃についてもそういう形でやらせていただいております。今回ですね、この資料1の2というところに、3ページからになりますけれども、令和6年環境スタディの受け入れ報告として、具体的にどういった団体を受け入れたかについては記載させていただいております。この期間につきましては、ちょっと中途半端な期間だと思うんですが、令和6年3月12日から令和6年12月14日。これはですね対馬市にこういった報告書を挙げるのが2月の末という事になるんですね。だから、2月の末の段階での数字を基本的には報告させていただいているんですけれども、要はその後のですね、実際に受け入れたのが大体3月の初め位から始まるという事で、今回は具体的にどれだけ受け入れたかという事で12月14日まで載せております。この12月14日というのはちょっとまだですね、予定の話にはなりますが、一応今回これ位までではないかという事で受け、報告させております。それで、実際の受け入れ団体数が延べの団体数で78団体。それから受け入れた人数ですね。これも延べで1,809名受け入れております。昨年に比べるとやっぱり150%以上ですね、アップしているのかなど。この勢いというのが、コロナがあった時にも関わらず、あんまり変わってなんですよ。多分今後はずっと増えていくんじゃないかなという風に想像しております。では、資料1の2、3ページからですね。ちょっと簡単にご説明をさせていただきたいんですが、黄色の塗りつぶし実施団体名のところ、これは今年初めて受け入れた企業様になります。それと後は団体とかですね、大学とかになります。IVUSAさんの隣にですね、釜山文化財団というのがありまして、ここの財団というのは初めてですね受け入れる事が出来ました。IVUSAさんは前からよくうちの方でも海岸清掃していただいている団体なんですけれども。それで起こった事と言いますか、IVUSAさんとですね、釜山文化財団が会う事によってですね、相乗効果が生まれまして、今度の11月の30日になりますが、弊社からも同席させていただくんですけれども、日韓若者プラスチック会議というものが釜山で開催される事になりました。釜山文化財団の方も、若い方でユースの方の世代と繋がりたいという想いがありまして、IVUSAさんの方も国際的にですね、国内だけではなくて色んなところで繋がりたいという双方のですね、考えてらっしゃる事、方向性が一致したという事で、私共を介して、対馬を介してですね、こういった新たな関係が生まれたというのは非常にありがたいなという事もありますし、私共もどんどんそっちに入って参加していきたいなという風に考えております。それから6番目のアスクル株式会社さん。よく対馬市と連携協定を結んでおりますので来られるんですけども、株式会社ZOZOの方が来られて、弊社の方でカヤックとかですね、環境スタディも受けていただきました。それから9番目に来てますアークエルテクノロジーズさんですね。こちら初めてお見えになりました。それからですね、13.14につきましては当初ですね、凸版印刷労働組合が来られ

る予定だったんですが、同じ時期にですね凸版の本体の方からもですね、視察にお見えになられて初めてですね、今年色々にご参加いただいて今後もぜひ対馬には来たいという様なお話をいただいております。それからページをめくっていただいて、先程、阿比留課長の方からも話がありました最近は県庁とかですね、後、自治体ですね。地方自治体の方からの視察が多いんですね。実際その対馬の海ごみという事についての視察にはなるんですが、この7月26日の佐賀県庁さんにつきましては、基本的に弊社が今やっております形態ですね。中間支援組織という形態について非常に興味をお持ちでいらっしゃいました。というのが、佐賀県の方でもそういった団体を立ち上げたいと。そういった団体に、ある部分のですね、まだ本決まりではないんですけど、清野先生が監修をされているという風にお聞きしているんですけど、プラスチックのセンターですかね。そういったところを運営したいという様な意向があるみたいで、やはりその中間支援組織そのものの形というかですね、そういったものに対して非常に興味を持たれておりました。それから企業様でいうと、花王グループのカスタマーマーケティングの株式会社という事で、お客様ですね色んなやっぱりそういったSDGsの商品を作る事に当たっての研修という事で来られました。それから36の、5ページになりますが、株式会社ICMG。ここは企業研修の会社なんですね。それで、企業研修の会社が自分たちのプログラム、企業研修のプログラムの中にこの環境スタディ、対馬の海ごみについての実習という事で入れていただいております。それから47番、厳原税務署さんで、ちょっと電話がかかって来た時は一瞬ヒヤッとしたんですけど、単純にごみ拾いという事でした。税関の方も一緒に来られたんで、一瞬ヒヤッとしたんですけど大丈夫でした。海岸清掃したいという事で来ていただきました。それからですね、53番にある大丸松坂屋さんにつきましてはですね、今日委員としてお見えになっていただいているSDGs推進課の財部課長のところがですね、取り組んでいらっしゃる、オーシャングッドアートというプロジェクトがあるんですね。これは海ごみで作ったアート作品を色んな所に展示したりとか、海ごみの普及啓発とかをやっている事業でして、弊社もその事務局というのを今年の4月からですね、受けさせていただいているんですけども、そこでこの大丸松坂屋さんの方が、色々そのアート展示だったりそういったものにご興味を持たれてまして、実際その事業自体は対馬市のガバメントクラウドファンディングで、行政が行うクラウドファンディングを元に運営をしていこうという様な形になっているんですが、そこにご賛同いただいている企業様なんですね。大丸松坂屋さん自体は、そういったところで今後ですね、クラファンとかにご寄付いただいた方とか、そういう方についての色んな提供であったり、後は対馬市自体が、この環境スタディツアーそのものを返礼品の1つとしてですね、お考えいただいているという事で、色んなものがマッチして、環境スタディツアーもそうなんですけど、アート作品等でのそういったものですね。海ごみについての認識であるとか、色んな角度からですね、そういった海ごみについて話がなされてるのではないかなという風に思います。それから修学旅行ですね。そちらの方もやはり年々増えておまして、これはこちらの委員であります川口委員の方からですね、お持ちの会社である対馬グリーンブーツリズム協会

様の方から、色々な修学旅行のやはりお話をいただいております。やはり年々、修学旅行の学校もですね、増えてきている様な状態です、今回は横浜女学院というところがお見えになりました。後、大手門学院高校につきましてはずっとですね、もうここ何年か続けていただいているので、この修学旅行等もやっぱり増えているのではないかなという風に考えます。こういう形で環境スタディツアーそのものがいろんな意味でいろんな繋がりを生んでですね、対馬の海の海岸清掃をただ単にしていってというだけではなくて、やはり海岸清掃しながら学んだりとか、実際に自分達の都市ごみ、自分達が都市で出したごみが最終的には川を伝って流れ、こういった島々にながれついたごみの掃除をしてもらうというツアーとしてですね、良い効果を得ているのではないかなという風に感じます。それに繋がる発表というのが、次の、実際にこのツアーに参加された方のアンケートになるんですが、そこについてはまた次ですね。波田というものが話をしたいと思うので、そういったところをですね。まずここまでで一旦ですね、ご質問等があれば承るので、そういう形でちょっとこの会は閉めさせていただきたいと思います。私の方からは終わりです。

清野委員長：末永様、ありがとうございます。それではいかがでしょうか。もう大変な充実ぶりでございます。いかがですか。では中山委員、お願いいたします。

中山委員：どうもご説明ありがとうございます。大変素晴らしい活動です。しかも沢山の方が来られてるという事で驚いたんですけど、特に企業の SDGs とか、そういったマーケティングとかの部署の方が来られているという事で、最近自分の会社の活動の自然環境への影響を集めて開示するという活動を企業さんが積極的にやられている。その勉強の一環とか、そういう事もあるんだと思うんですけど、参加された企業さんが、ここで色々得られた情報とか学んだ事を持ち帰って、どういう風に自分の会社の中で役に立てておられるとか、その辺の情報というのは入手する事は出来るんですかね。非常に気になるんですけど。

運営(末永)：まずは次の方で話すアンケートという形式でお話をいただいているんですけども、ただ、担当者の方からですね、メールとかですね、あと振り返りとしてアンケート以外に意見をお聞きしたりしてるんですね。そこで、それについて率直に出てくる言葉というのが非常に現実味があると言いますか、もうごみを捨てないようにしましょうとか単純にとそういう事じゃなくなってきたという風に思います。例えば、もうこれは捨てるのも難しいですねとありまして、後、印刷会社ですね凸版さんとかで言うと、中国のペットボトルの印刷を見てですね、摺りが甘いと。印刷の仕方が、色の合わせがズレていると。だからやっぱりこれクオリティが低いという様な意見をいただいたり、ちょっと海ごみ以外の話でも、商品についての話ですとか、やっぱり新しいものを何かやりたいというんですかね。比較的そういう意見を出される方は若い方が多いです。企業に持ち帰ってこういうのを提案しますとかおっしゃっている。もう雰囲気的に本当に SDGs というのをちゃんと分か

っていて、そういう暮らしをしていこうという様な感じの方がやっぱり増えてきてらっしゃるので、そういった方々もそういう様な形で意見をいただいたり、感謝の言葉みたいな感じのメールとかも来るので、そこに何か本音が出ているのかなという気はします。

清野委員長：他にいかがですか。ではちょっと私からも聞かせてください。プラスチックの製品で、ボトルとか以外にもフィルム系のものとか結構あるんですけども、あれは体積とかは多くないですけど、結構また厄介なごみの1つかと思います。それについても、製造に関わられている会社さんもこのリストにあるかなと思ったんですけども、何か代案というか、代わりにこういう製品をみたいな話は出ますか。

運営(末永)：フィルムとかにつきましてはですね。やはり化学系のメーカーでそっちを作っている方が多くて、薄いフィルムだったり特殊フィルムだったりで、飲料系の方から出たのはいけないんじゃないかと。あまり細かい文字自体が。例えばそれをQRコード1つ貼って表示できるようにするとか。中々、敢えて書く必要性がないんじゃないかという様なご意見をいただいた事はあります。ただそれだと自分達の仕事なくなりますけどねという。そうですよという事がありました。

清野委員長：ありがとうございます。ペットボトルのリサイクルとかを進める為に、ラベルを剥がしやすくしましたと言われると、それが飛散するんですけど。という話がありまして、中々、ごみ拾いのこういう現場を見ていただくと、また製品のアイデアだとか、別の意味での印刷なりラッピング等、アイデアに繋がると良いなという風に思いました。ありがとうございます。他にいかがでしょうか。小島さん。

小島副委員長：特に素晴らしいし、これからの期待したいなと思ったのは、市役所さんやCAPPAさんが受け入れてこういう機会を提供してきたという事だけじゃなくて、島の中の他の動きに繋がって、例えば川口さんのところとCAPPAさんが、川口さんのところに来たお話が紹介されるとか、そういう相互の繋がりというのがこれからもっとより広がっていく可能性が沢山あると思ったんですね。以前に私共が、東京からある企業をこの環境スタディツアーとして対馬にお連れしてお世話になった時も、昼食を無理を言って犬東さんのところで「そうすけ」のお話をさせていただいたりとか。ですから、課長が冒頭おっしゃった様な、ごみだけではなくて様々な対馬の資産の様なものがこういうツアーの中に入れていけると、対馬＝ごみの島みたいなのはやっぱり言いたくない事だと思うので、ごみがきっかけで対馬に来たけれども、そこでその食の事とか、文化の事とか、ごみに目を向ける以外の様々な活動と繋がって、更にそれがこれからの継続的な観光に繋がるとか、そうなっていくと良いなと思いました。

清野委員長：ありがとうございます。いかがでしょうか。コメントなり。

運営(上野)：昨年やった活動をここに載せさせてもらったんですけど、後、そういった犬束さんのところとか daidai のももちゃんのところとか、グリツーとかですね。環境に対しての取り組みをやっているところは結構対馬の中でもいらっしゃるんで、そういうのもこういう場ですね、委員の方も多いので、中間支援組織という形で、そういうのをまた総合してやっていきたいと思います。よく環境スタディツアーに来られた方に対馬初めてですかと聞くと、ほとんどの方が初めてと答えられます。大体対馬は観光地としては最後なんですよ。皆さん沖縄とか佐渡ヶ島とかを行って、最後の最後対馬に来てくださる方が多いんですが、この環境スタディツアーがきっかけで対馬を知っていただいて、環境から観光に繋がると。その中で例えば、ツアーのお弁当を犬束さんのところをお願いするんですが、弁当箱をプラスチックではなくて繰り返し使える容器に変えましょうと提案していただいて、今はそのお弁当箱を準備していただいています。そういった形をこれからもこの対馬 CAPP が中間支援組織として繋げていきたいと思っています。

清野委員長：ありがとうございます。他にいかがでしょうか。今、お話があった犬束委員から何かありますか。

犬束委員：海ごみを通した活動というのは大きく前進したなと思っています。それで1つ質問なんですけど、対馬が初めてという方がたくさんいらっしゃって、じゃあ、2回目来ましたという方はどうなんだろうと思うんですよね。うちの体験ツアーだと初めて来ましたという方に、初めてでやっぱり海ごみも見てもらったりするんですけど、それきっかけで2回目来ましたという方、やっぱりリピーターの方がいらっしゃって、それでごみ回収をされた後にまた来て回収してますよという方がいらっしゃったら教えていただきたいなと思います。

運営(吉野)：すみません。対馬 CAPP の吉野です。つい先日も化学総連様。化学総連様は、この協議会の方で何度かご紹介させていただいた環境スタディのもう常連と言いますか、1番最初に対馬にお越しいただいた環境スタディの団体様なんですけど、その方々が先日いらっしゃいまして、私もほとんどの方々が最初という認識があったので、私がちょっと海ごみ授業させていただいたんですが、その時に対馬は初めての方いらっしゃいますかと投げかけたところ、半分以下だったんですね。ほとんどが結構、その時は半分位が4回目、5回目とか、2回目、3回目という方が結構いらっしゃって、逆にちょっとびっくりしてしまいましたが、その化学総連様のツアーをきっかけに、もうその化学総連の団体として参加が4回目です。3回目ですという事で、何度もお越しいただいているという事にこの間もびっくりしたんですが、私達の提供しているプログラムとかというのはほぼ変わりがないとい

うか、中身は海ごみ授業と海岸清掃とシーカヤックという事で、中身自体は変わらないんですけれども、やっぱり何度も来ていただくというのはすごく関心があるんだなという事で、食事も毎回楽しみにしてますとか、前回あなごだったのが今日お刺身でしたねとか、そういった形でお話いただいている、何か本当に次に繋がっているなというのを実感いたしました。結構企業様、何度もお越しいただいているんですが、中でも同じメンバーもいらっしやる、新しいメンバーもいらっしやるという、そういったところでございます。

運営(上野)：いいですか、すいません。今のリピートの件なんですけど、エコツアーを20年位やらせてもらってですね、ツアーでリピーターというのは非常に少ないんですね。対馬自体が少ないので、もう本当に一部。コアな歴史好きの人か、もうめちゃくちゃシーカヤックが好きなのか。でもこのスタディツアーで、今黄色マークでプリントされているのが初めてのところなんですけど、後のところは何回も来てもらっている。企業として、例えば修学旅行とか団体の環境ツアーの企業1つ来てもらうとですね、それがずっと繋がって、来られる人達は初めてでも、この企業とか学校は何回も来てもらえるという。ちょっとエコツアーと違う形の、その人達のグループの中では初めての人が多かったとしても、その企業としては一回探してもらうと、これが結構大きいなという。自分では今までの観光と違って学ぶ為の環境をやり出して、それをやってくるとその企業、団体が、大体役所もそうらしいんですけどエコツアーに関しては、1個島に行ったら次は他の所に行きたがるんで、中々リピーターというのは難しいんですけど、でも来てもらってそのツアーがものすごく素晴らしかったらですね、間接的リピーターというか、1度は行って見るべきよという形で、間接的にリピーターが増えて、それが企業だと何回も来てくれるという事があってですね。その中では、今吉野が言った何回も来てくれるというのは特別何ですけど、企業で例えばアスクルさんとかで来てもらう人達はほとんど初めてなんですけども、アスクルとしては何回も来てもらうという事が重要な事で、それが結構大きな観光人数に繋がっているんじゃないかと。今までエコツアーだと中々本当に、トップのトップ位しかリピートは。今年も行こう、何年後も行こうというのは、実際それ欲しいんですけど、その中でも間接的なリピーターもやっぱりエコツアーの中でも増えてきたんで。いや、上野さんのツアーがあって、何か面白かったらしいんでそれ聞いて来ましたという。参加した人達は次、小笠原とか行きたがるんですけど、その間接的リピーターさえ今まで対馬は、もう2度と行かなくていいという妙な間接的リピーターになったら、その噂だけが、ホテルとか泊まるともう壱岐の方が良いよとか五島の方が良いよと言われてしまったらですね。ちょっとあれなんで、そういう意味では、このスタディツアーは次に繋がっている、リピートに繋がっていると思います。

犬東委員：じゃあ、先程の話も含めて色々な事を思った時に、このスタディツアーはCAPPAさんを中心に素晴らしい事をされているところなんですけど、CAPPAさんと協力していく企業とか対馬の人皆全体で、次も来てもらえる、スタディツアーに来てもらえる様な心構え

で取り組まないといけないという事ですよ、先程のお話。それとですね、大船越中学校の生徒さん、小学4年生からずっとイスズミとか、アイゴの事でやって来た子供達がいるんですけど、生徒さんがですね。その子達が、小学4年生の時の感想文には、海ごみの事に触れてなかったんですよ。磯焼けの事も、磯焼けという言葉よりも作業の方が楽しいとか、試食が楽しみとか、メニュー作りが嬉しいとかだったんだけど、毎回色んな感想文だったりお手紙をもらううちに、今回中学3年生になって、その子たちがやっぱり海ごみだったり、家族と共有したいという様な。私達の生活の選択という言葉がですね、非常にあって生活していく中で心がけて生活していかないといけないという事がですね、書かれている生徒さんが数人いたので、ちょっと驚いたなと思いました。

清野委員長：ありがとうございます。他にいかがでしょうか。では、SDG s 推進課さんの方から企業さんとの連携だとか、そういう文脈でいかがですか。この資料をご覧になって。

財部委員：SDG s 推進課の財部です。今お話がアスクルさんを例に取らせていただくと、アスクルさん、まず最初に社長が来られてですね。今年は入社した新人研修に来ていただきました。そしてその他も年に3回位、会社として訪問していただいております。この他にもですね、連携協定を結んで来ていただいているところはあるんですけども、どれもですね、募集をすれば30名とかという人数応募に対してですね、すぐ締め切りになってしまうという位人気があるという事でお話を聞いております。アスクルさんの方もですね、社内の会報誌と言うんですか、雑誌の中に体験談であったり、行った方に見てきた感想であったりというのを載せていただいておりますので、この他にもそういった会社の方が増えてですね、色んな方が関心を持っていただけるものと私は信じておりますので、今後とも頑張っていきたいと思っております。

清野委員長：では課長さん、お願いします。

事務局(阿比留)：環境政策課長の阿比留です。今回のこのスタディツアーはですね、SDG s の名のもとにですね、福岡の人でも壱岐に行った事はあるという人多いんですよ。皆さんもご存じの通り。但し、壱岐は何故そういう風にたくさん行かれるかという、安近短なんですよ。安くて、近くて、1日でも帰って来られる。ところが、対馬は高延長なんです。遠くて、高くて、長い時間が必要になるという事で、対馬に来ていただく為にはその理由、動機付けが必要なんですよ。その動機付けに、このSDG s の名のもとに、この海岸漂着物があって、それがまた企業のお金で来れるんですよ、この研修とか修学旅行とか。そういう風な自分のお金で行くんじゃなくて、会社のお金でも来れるという風なのが、良いスタディツアーの何回もリピーターがあるという。そして1回このスタディツアーに参加するとすごく学びがあって、そしてそれを持ち帰って、また行こう。あなたも

行った方がよいという風な広がりがあるんだなという風に思っています。そしてまたそれプラスの観光セクションが持っているそういうコンテンツがありますのでですね、51泊以上になれば20万円補助金が出るとか、そうするとまたバス代が出るとかですね。そういう風な組み合わせでまた来れるようになってきますし、また「しま旅」という風なコンテンツもあるんですけども、そちらに体験ものを、今度はCAPP Aさんのこの海ごみ回収作業とかが入ってくればまた広がりが出てくるかもしれませんし。そういう様な事で、これからもこのプラスの食とか、アクティビティとか、登山とか、もちろん歴史的なものですね、朝鮮通信使があつたりとか、戦争以降の元寇とか、日本海戦の歴史とかそういうものを少しずつ学んでいくと、対馬の歴史の面白さ、深みにはまっていってもらって、また行こうという風になってくると思いますんで、そういったところを、色々なセクションを共同ですね、スクラムを組んで進めていきたいと思っております。以上です。

清野委員長：ありがとうございます。海ごみの会社の研修がきっかけであっても、やっぱり今課長さんがおっしゃった様な、非常にね多様な歴史、文化、自然に触れてという。まず対馬との機会を作るには非常に重要なね、何か課題解決と言っても、問題が、問題がというだけじゃない、何か対馬そのものへの関心も深まっているというのが今ご意見いただいたところです。ちょっと教えていただきたいのは、交通はこの方々はどうやって、飛行機と船とかだとどれ位の割合ですか。大体で結構なんですけど、もしお分かりになれば。

運営(末永)：具体的には取ってはないんですけど、大体やっぱり遠くから来られる方は飛行機の乗り継ぎが多いと思います。近い九州の方だとフェリーとかもあります。若い方ばかりとかは特に、高速船とかフェリーが多いかなという感じです。

清野委員長：ありがとうございます。今後またそういうデータもあるとですね、離島航路とか離島の飛行機とか、やっぱり乗る人が多いという事もその維持の為に重要ですし、それによって結局島民の方の、普段の交通の便も良くなるとかいう循環になるのかなと思えました。また、他の委員さんもいかがでしょうか。では、続けてご説明いただきますが、またそこでもご質問等いただけたらと思います。非常に充実したデータを基にありがとうございます。それでは次のテーマでお話いただきたいと思います。次はですねアンケートで、令和6年環境スタディ体験者アンケートの報告でございます。よろしく願いいたします。

運営(波田)：こちらから失礼いたします。対馬CAPP Aの波田と申します。よろしく願いいたします。私の方からは、令和6年環境スタディ体験者アンケートについて報告させていただきます。まずこのアンケート調査の目的といたしましては、海岸清掃ボランティア受け入れや環境スタディツアー体験を通し、漂着ごみの普及啓発の効果や問題点、満足度を把

握る為に実施しております。調査方法についてですが、今回アンケートの対象として①ボランティア受け入れ窓口による受け入れ及び、環境スタディを実施した中学生及び高校生。そして②環境スタディを実施した企業又は団体を対象にアンケートを実施しました。続いて調査手法といたしましては、①に対しまして、資料に載せておりますアンケート調査票により回答していただいております。そして、②につきましては、事前にエクセルファイルをお送りいたしまして、フィードバックシートによる自由回答方式でご回答いただいております。すいません、ページ数では8ページからになります。次に9ページになります。回答結果につきまして、まず実施団体、中学校、高校について、長崎県立対馬高校ユネスコスクール部、対馬市立東部中学校及び西部中学校。そして、修学旅行の一環として環境スタディツアーに申し込みいただきました大韓民国釜山日本人学校にアンケート調査を行いました。回答数としては、合計で36人に回答いただいております。続いて2番の企業、団体につきましては、アークエルテクノロジーズ株式会社、アスクル株式会社、凸版株式会社及び凸版印刷労働組合、株式会社ICMG様に回答いただいております。合計で88名に回答いただいております。全体としては、124名にご回答いただいております。こちらの資料に載せております清掃海岸と回収物については、先程も申しました様に、団体の目的や海岸の状況に合わせて選定しております。またこのアンケート調査は今後も続けて実施していきたいと考えておりますし、海岸清掃後の現場での振り返りの感想等も、随時蓄積を続けております。10ページをご覧ください。回答結果の具体的な回答内容についてまとめました。こちらの感想についてなんですけども、意見や感想が伝わりやすい様になるべく表現を変更せずにご報告させていただきたいと思っております。まず、①中学校、高校について、9の1海岸清掃活動、回収ボランティアに参加したのは初めてですかという質問に対して、初めてと答えた方は24人、いいえと答えた方は12人でした。続いて9-2調査や漂着ごみの回収に参加して感じた事、思った事があれば書いてくださいという質問について、1番多かった感想が、ごみの多さに驚いた。次に、美しい対馬の海に大量のごみがあって悲しい、台無しという感想が多くありました。その他にも、11番のごみの処理は拾うより大変なんだと実感した。13の色々な国のごみがあり、難しい国際問題だと思った。15のプラスチックは便利だけどめんどくさいものだと感じた。17番リサイクル出来ないプラスチックがたくさんあった事に驚いたという感想をいただきました。率直にすごく素直な意見をいただいたと感じております。この清掃活動をした事のある、ないに関わらず、ごみの多い海岸を見るという事、清掃作業の体験というのは、対馬の抱える問題と共に、漂着ごみ問題の深刻さというものを自然と体感してもらっているという事がこの感想によって分かりました。続いて11ページをご覧ください。9-3調査や回収ボランティアに参加して、もっとこうしてほしい、工夫した方が良いと思う事があれば書いてくださいという質問に対して、こちらは全部ご紹介させていただきます。上から、ボランティアにはお金も時間もかかるのは分かるけど、やっぱりもっと拾う回数を増やした方が良いと思っていただけ、キリがないという事を聞いて少し難しいのかなと感じた。もっとたくさんごみを拾いたい。蜂が多くて怖かった。もっと

色々なごみの種類を見たい。木も拾った方が良かった。ごみにポイントを付けて、ごみ拾い大会を行えば良いと思う。1か月に1回行くと良いと思う。もっと人数を増やした方が良い。時間帯をもう少し合わせてほしい。人の力だけでなく、機械の力を借りたり、全ての商品に集めやすくするものを入れたり、まずは自分もごみをちゃんとごみ箱に捨てるようにしていきたいという様な感想をいただきました。特に、このごみをもっと拾いたい、定期的にごみ拾いをしたいという様な意見につきましては、弊社が現在、力を入れております普及啓発の面而言えば、本来ごみというものは海で拾う必要がないという事を伝えていきたいと私達は考えておりますので、こういった意見が出るという事で、海ごみを拾う事よりも普段の生活のごみに対して意識していただけるきっかけになると考えます。また他の意見も参考にしつつ、対馬市の現在のごみ処理の現状を伝えるだけでなく、日本で取り組まれている政策についても伝えていく必要があると感じております。続いて9-4 対馬の海、海岸を見てどう思いましたかという質問に対して、1の美しいと思ったが、近くでみると汚れていて悲しい、残念、もったいないという意見が1番多くありました。その他にも、10のごみが無い場所を写真に撮っている人もいたので本当の姿も写してほしい。13の回収しなければ3年後、5年後はどうなるのか不安。14の人の手でしか回収出来ないので頑張りたいという様な感想をいただきました。続いて12ページをご覧ください。9の5 対馬の海、海岸のごみをなくす為にはどうすれば良いと思いますか。あなたならどうしますかという質問に対して、上から、1の定期的に街ごみを含めてごみ拾いをする。少しでもごみを減らそうと意識する。ポイ捨てをしない。外国の方や、周囲の人達へ対馬のごみについて伝える。家庭での分別やりサイクルをきちんとする。ボランティア活動に参加するという順番で多くいただきました。こちらの感想を見ても、海岸清掃をするという事は本来当たり前であるはずの、ごみを減らすという事やポイ捨てをしないという気持ちを、改めて感じてもらう為にはやはり重要であると考えます。周囲の人達にごみについて伝えたいという意見も多くいただきましたので、こちらも本来であれば大人達が子供達へ教えていかなければならない事を、子供達が伝えていきたいと思ってもらう事は、やはり普及啓発の面では私達の行っているスタディツアーというものは意義があると考えております。その他にも9番のまず素材を変える。11のルールを厳しくする等の意見をいただいておりますので、こちらもどうすればごみをなくす事が出来るかという事を考えた時に、私達大人が今、取り組んでいる事と同じ様な発想が出るんだなと率直に思いました。こういった感想は、釜山日本人学校の学生さんからも同じ様に意見が出ましたので、国に関係なく海岸清掃を行うという事は、同じ様な効果があると考えます。最後に、9の6 その他感想があればどんな事でも書いてくださいという質問に対して、環境スタディに参加した学生から1番多く、シーカヤック体験が楽しかった、美しかった。という感想をいただきました。また、6の対馬の山にごみを埋めている事を初めて知ったという意見もいただいておりますので、対馬の現状を伝えていくと同時に、現在のこのごみ処理の現状解決への取り組みも、更に進めていかなければならないのではないかと考えます。続いて13ページをご覧ください。企業、団体についてフィードバ

ックシートによる意見、感想を基に環境スタディプログラムの環境授業、海岸清掃、シーカヤック体験、総合に分類し、弊社のスタディプログラムについて独自に考察を行いました。まず意見、感想についていくつか抜粋し、紹介させていただきます。1 環境授業について、6の環境スタディを受ける前、漂着ごみの大半は海外のものが多いと聞き、少し憤りを感じながら参加したが、日本のごみはハワイへ流れ着いていると知り、憤りから恥ずかしいという気持ちに変わった。10の地域の年配の方がごみを捨てているという話も印象に残っており、個人的にはここもかなり改善の余地があるのではないかと感じたという意見を、同じ様な意見で複数いただきました。こちらの感想からも、海ごみに対する意識の視点の変化ですとか、島内のごみに対する話を弊社の授業の中で行っておりますので、それについての意見もいくつかいただいたなという風に思っております。14ページをご覧ください。2の海岸清掃について、1漁業用ブイを回収しようとした際に、ブイに付いている縄が土の奥深くに埋まっている為回収出来なかった。長い間そのまま残っていたものと推定でき、早い段階で回収しないと簡単には回収出来なくなってしまう事が体感出来たという様な意見ですとか、11拾って終わりのイメージがあった海岸清掃だが、搬出やりサイクル方法等、その先の重要性を知る事が出来た。19番の東日本大震災を経験し、景色が様変わりし、友の家も死体も当たり前のように転がっていた風景から13年経ち、整備が進み目に見える災害がほぼなくなり、やっとここまで来たかという想いの一方で、対馬の海洋プラスチックごみは清掃しても終わりが無いという、また震災の時とは違った感情というか根気があるというか、何とも言えない果てしない目標、悲願なんだなと実感した。ごみの事だけで見れば、震災のごみの方がかわいいものだったかもしれないと思ったという様な感想もいただいております。最後22番のお菓子やジュース、コーヒーのごみが細かく、汚いイメージがあり拾いにくく、生活している中で私達が出しているごみが最も邪悪だと感じたという様な感想もいただきました。対馬のごみというのは、容量の大きい漁具のイメージが強いですが、弊社が伝えていきたいのはその中にある生活ごみに対して、どれだけのものが海ごみになっているかという事を実感してもらおう事だと考えますので、これらの感想で実際のごみを見てもらう事、拾ってもらう事というのは、言葉で伝えるよりも、海ごみの回収の、その先の処理まで自然と考えるてもらえる活動であると感じます。続いて、16ページをご覧ください。3シーカヤック体験について、こちらはほとんどの方が、対馬にこんなに美しい自然がある事を知らなかったという感想で、とても感動したという感想がほとんどでした。また、海ごみの対比により、自然とこの自然を守らないといけないと感じたという様な感想をいただきました。最後になります。17ページの4の総合について、1番の様に、分別やりサイクルについて次回はそちらも見学したいという様な意見ですとか、5番の1人1人が意識していかなければいけないということ、そしてそれを周りの人へ伝えていかなければいけないという感想をやはり多くいただきました。20ページをご覧ください。以上の意見、感想を基に環境スタディツアープログラムについて、弊社独自に考察を行いました。まず1の効果について、島内外を問わず、大量の漂着ごみが存在する海岸を見る機会は多くない事から、

SNS 等では得られない実感を提供する事で普及啓発効果を高める事が出来ると思います。次に、現代が生み出した大量のプラスチックごみと、古代から残る自然を体験出来るカヤックツアーを組み合わせたプログラムにより、漂着ごみ問題の深刻さをより明確に伝えるツールになっていると考えます。最後に海岸清掃活動において、全種類を回収する事と、回収物を限定して回収する事の各メリット、デメリットはありますが、特に回収物を生活ごみに限定する事で、1つ1つのごみに注目しやすく、ごみ問題は自分事であるという意識改革へ効果があると考えます。次に、この環境スタディツアーの問題点について、今後も環境スタディツアープログラムへの申込が増加する事が予想されますけれども、大人数の団体が清掃出来る海岸が限定しており、特に安全面や衛生面について、全ての団体を年間を通して受け入れる事が困難になる可能性があります。次に、近年、海洋漂着ごみ問題に対し関心が高まってきておりますけれども、プラスチックごみの大多数は生活ごみであるという認識が未だ低く、家庭ごみは分別してごみに出す事が当たり前ですけれども、海ごみになるとボランティアが前提である為に、全てのごみを一括して回収して良いものという認識がほとんどであります。以上を踏まえて、21 ページの課題、提案についてまとめました。課題として、対馬 CAPP が行う海岸清掃及び環境スタディプログラムは、漂着ごみ問題に対し、普及啓発活動へ一定の効果があると実証出来ました。今後も、単なる清掃活動ではなく、普及啓発をメインとしたプログラムを行っていく必要があると考えます。次に、島内について現状として学生が主な対象でありますので、幅広い世代に対してどのように普及啓発活動していくかが、今後の課題であります。特にここに関しまして、そもそも島民のごみ問題へ対しての意識が低いという事が、1 番問題であると感じておりますので、今後 1 番が、この課題であると感じております。最後に、雨天時に提供出来るコンテンツが少ない為、晴雨関係なく充実したプログラムの提供を出来る様に検討していきたいと考えます。現状では、海岸視察やシーグラスを使ったキーホルダー作り等を行っておりますけれども、対象者が限られる事と、大雨とか強風ですと海岸視察も中々実施出来ないという事もありますので、建物内でも出来るプログラムを増やしていきたいと考えています。最後に、提案といたしまして海岸清掃活動の際に、回収作業方法の事前説明を行っておりますけれども、それでも尚、分別回収が徹底出来ず、ごみに対して家庭ごみと海ごみは繋がっているという認識を持ってもらにくい事から、現在対馬市としてはこちらの黄色いごみ袋を使用しているんですけども、壱岐市のボランティア回収では、こちらの様に回収するものによって袋を変えております。こちらでは、燃えるごみと金属類、そしてガラス性の容器、陶器類という様に 3 種類なんですけれども、こちらをサンプルとさせていただきまして、対馬市のボランティア袋のごみ袋の改良というものを検討していただきたいと対馬 CAPP から提案させていただきたいと思っております。私からの報告は以上となります。

清野委員長：どうもありがとうございました。重要なアンケートですね、原文の文字データも共有いただいて、すごく生々しいご意見をご披露、共有いただきました。それでは委員

の皆様、いかがでしょうか。後、オンラインで参加されている委員の皆様も、どうぞご意見ありましたらぜひお願いしたいと思っております。オンラインの方にも今日中に、何かどのテーマかをお願いいたします。では、山下委員さんいかがですか。

山下委員：すいません。21 ページの大きな4番、課題提案の(2)の提案の部分ですけども、1番下の行、ボランティア袋の製作をけんとうしていただきたいの、せいさくの漢字がちょっと違うかなという部分と、先程壱岐市さんの袋のやつ見させていただいたんですけど、可燃物の方は、プラスチックも入るんじゃないのでしょうか。

運営(波田)：私達が参加させていただいた時の壱岐市の回収で、この燃えるごみというのは、ペットボトル、発泡スチロール、漁網ロープ、廃プラスチック全て一緒にこの燃えるごみとして入れたんですけども、その要因と言いますか、そうして良い理由というのが、壱岐市ではそれを燃やしても大丈夫なボイラーと言うんですかね。それを導入されているという事で、一括して回収して、私が見たのは普通の家庭ごみを回収するごみ収集車がその場まで来て、その場でこの袋をごみ収集車の中に入れて、それでも焼却施設へ持って行くという作業を行っておりましたので、燃えるごみという風になっているんですけども、対馬市はリサイクルという面もありますので、同じ様な形では出来ないとは思うんですけども、こちらはサンプルとして対馬市では対馬市のバージョンで製作をしていただきたいという風な提案になります。

山下委員：例えば対馬の海岸で回収したプラスチックごみで、その焼却場で燃やすものと、他に処理施設で処理するものって明確に分けられるものなんですか。ちょっとその辺が実態として分からないんですけど。

清野副員長：ご質問ありがとうございます。いかがでしょうか。

事務局(福島)：環境政策課の福島です。一般家庭から出て来るプラスチック類は、一般廃棄物として対馬のクリーンセンター安神の方で焼却をしているんですけども、対馬市の海岸で拾ったプラスチックは産廃扱いにしておりますので、焼却施設で現状、燃やしているという事はございません。ですので、リサイクルに回せるプラスチックの部分は再選別を中部中継所の方でいたしまして、リサイクルに回すと。それ以外のリサイクル手法が確立していないプラスチックについては、対馬島内の処分場で埋め立てているというのが現状でございます。以上です。

清野委員長：ありがとうございます。山下委員さん、いかがでしょう。

山下委員：家庭のごみと海ごみが繋がっているという認識を持っていただくという事での提案だと思うんですけど、それは色々なやり方があると思うんですけど、そこは回収作業の後の方がよろしいかと思うんですけども、そこでやはりきちんと説明すべきなのかなという事ですね。当然その費用もかかる事だと思いますので、その辺をどうやっていくかというところは、やっぱり時間をかけて検討する必要はあるのかなと思います。以上です。

清野委員長：ありがとうございます。いかがでしょうか。何かその辺り、自分の参加した時にもうちょっと集中して聞いてから始めたら良かったかなと反省もあるんですけども、いかがですか。ビーチクリーンの現場で説明されたり、それによって参加者の行動なり気づきが変わるかという事が1つで、もう1つは海ごみを回収した後に再選別というところが、中々一般には目に触れる事がないと思うんですけども、対馬市さんの方では多分そういう事をしてますよという事自体を開示しているという事かと思います。では、今の事についてご意見、もしどなたからでもありましたら。では中山先生が、一般的な事でも良いんですけど、さっきの産業廃棄物とか一般のごみの話とかも普段生活していたら、逆に産業廃棄物というのはあまり身近にないと思うんですけど、海岸清掃に行ったらそれが産業廃棄物になっていたとかいうのは、社会全体としてもう一度知った方が良いなと今、改めて思いました。いかがでしょう。

中山委員：そうですね。日本の法律、廃棄物処理法では実はですね、最初に産業廃棄物が定義されているんですよ。産業廃棄物というのは、要するに事業者が自分の営業活動というか、事業活動で副産物として出たもので、その処理責務というのは排出事業者が責任を持つと。それ以外のものが一般廃棄物という法律になっているんですよ。ですので、海岸ごみというのはちょっと扱いが特殊で、それ以外のものみたいな形に分類されている中での取り扱いというのが一般廃棄物。海岸清掃とかで集められたものは、一般廃棄物とする事になっていると思うんですけど、ただものによっては何というんですかね、普通に我々が生活の中で出しているものとはちょっと違ったものとかも、もちろん漁具なんかは全然生活の中から出て来るものじゃないので、どちらかというとな産業廃棄物に近いものもあったりするので、その取扱いというのはちょっと特殊だとは思いますが。先程、分別は私ももうその場で出来るのであればもちろん現場でした方が良いと思います。発生現場でですね、分別出来たら。ただトータルの、時間的な効率とかですね、コストとかを少し考慮しながら、分別する事によってその収集量自体が減ってしまうと、逆に効率が落ちちゃう可能性もあるので、再選別でも出来るんだったら別にそれでも良いんじゃないかと思えますし、その辺りはトータルで検討する必要があるかなという風に思います。この中にですね、ちょっと今の関連するところがあって、対馬の山にごみが埋まっているという話が紹介されて、これは多分漁網なんかをその安定型処分場に持って行って埋めている事だと思います。やっぱり経済性とかですね、エネルギー効率性とか色々な状況を考えて、山に持って行かざるを得ないもの、

対馬に限らずですね、これは本島の方でも、プラスチックを埋めている状況というのはたくさんあって、特に塩ビなんかは燃やす事も出来ないし、リサイクルも難しいので埋めているんですけども、それをどうにかしないといけないというのは、海ごみに関わらずですね、課題としてはありますね。なので、分別についてはそういう風に私は考えます。発生現場で出来た方が効率が上がるのであればそっちの方が良いし。どうなんですかね。私も海岸清掃に何度か参加した事があるんですけど、私がこの間参加させていただいたものも特に分別なかったですね。全部まとめてだったんですけども、あれで分別しろと言われたら、中々ちょっと大変かもしれないなと思いますね。それはちょっとトータルで考えた方が良いんじゃないかなと思います。

清野委員長：結構、実は本質的な重要な問題ですが。小島委員さんお願いします。

小島副委員長：一般の方達の活動も含めて、色んな所で海岸清掃体験するんですけど、自治体によって原則、ボランティアが回収してきたものは一般廃棄物として処理を受け入れているところが多いんですね。ただ同じ自治体内でも、家庭から出るごみと海岸で捨てたごみは性状が違う。汚れているとか砂が入っているという問題があるので、お家から出した時はこういう風に分けているけど、同じ自治体でも海岸清掃だと分け方が違うよと、結構複雑な構造を持っているところがあります。その場合でも、海岸のごみの場合はこういう風に分けてくださいという風に明確に分かれてボランティア袋が用意されている自治体もあれば、その最終的な処理方法とか効率性からも、全部一括して集めて処分場で再処分か、あるいはもう全部焼却という様なそういうどちらかが多い様に思うんですね。対馬の場合、漂着しているごみの量が非常に多いのと、受け入れているツアーの中でやると時間的な制限がたくさんあるので、現場での分別ってすごく学びにはなるんですけども、そこにどれ位時間がかかけられるかというのが1つ考えなければいけないところだと思いました。沖縄の石垣島でボランティア活動として始まって、色々清掃活動が行われているんですけど、そのやり方は袋に入れるのは最後で、繰り返し使える何て言うんでしょう。折り畳み式のごみ入れみたいな簡単なコンテナの様なものに、とにかくどんどん、どんどん分けないで入れる。そして、分け方がちゃんと分かっているスタッフが待機している所で、スタッフが声かけをしながら発泡はこっちの袋、ペットはここ、漁業のブイはここという風に現場である程度分けて、それで市の方が回収するという風にやっている例もあります。ただそれはすごく時間がかかるので、出来るかどうかはそれぞれの活動によって異なると思いますけれど、一例としてご紹介します。

清野委員長：ありがとうございます。よろしいですか。それでは市役所さんからも何か追加のご意見、コメント等ありましたら。

事務局(福島): 環境政策課の福島です。海岸清掃についての分別の方法なんですけども、今、各漁協さんと契約をして海岸で集めているごみは、基本的にプラスチック類、発泡スチロール、ペットボトル、漁網、ロープ、そして流木、可燃物、不燃物、医療系廃棄物、その辺はもう海岸で分別をしていただいております。その海岸で分別したもののうち、例えば韓国からの青いタンクとかも分けて回収をしている状況なんですけども、プラスチック類については、更にその中からリサイクル出来るものが混ざったまま来るといったものが多いです。なので流木は流木で集める。集めた流木というのは、もう基本的に流木しか入っていませんので、そのままチップにするという方に回んですけども、プラスチックについては中部中継所で、更に選別してリサイクル出来るもの、出来ないものというのを分ける為に選別をしております。なので、ペットボトルに関しても基本的にペットボトルがフレコンバッグに入ってくるんですけど、その中でも例えば貝殻が付いて、これはリサイクルに回すと機械が壊れるので弾こうとか、このペットボトルはきれいだからリサイクルに回せるねとかいう様な選別の仕方をしていきますので、基本的に海岸では分けています。ボランティアのものに関しては、基本的に分別はされているんですけど、ボランティアは先程言われた様に、一般の廃棄物という形で持ち込みをしていただいておりますので、それはごみを捨てる際に持ち込んだ方が、職員の指示に従って細かく分けているはずですよ。焼却炉に入れられるもの、入れられないものというものを焼却所の職員がこれはだめです、良いですというのを、開けますので1回。そういう家庭ごみを直接持って行かれた方は分かると思うんですけども、そこで全て分別させられますので。ただそれを家庭で出来る様になったらいいなという事で、今、環境政策課でそういう風に出来ないかという取り組みをしているところです。

清野委員長: ありがとうございます。随分自治体とか、後、担当される方によっても違うんだなというのと、後、対馬市さんの場合は一般市民も持ち込んだ時にこうですよと色々指導されるというか、1回再選別みたいになってそれによってまた覚えていく様な感じになるんですかね。

事務局(福島): そうですね。北部中継所、中部中継所、そして安神のクリーンセンター。直接的に私は一般廃棄物の担当ではないんですけども、持って行ったらまず持って行ったごみを、例えば軽トラックの荷台に積んでたりするごみを、このごみはここに降ろしてください。そしてそのまま車で動いて、このごみはここに降ろしてくださいとずっと指示をされます。例えば市役所から、年度末に書類を持って行ったりする時も、ファイルは全部ばらしてくださいとかそういう指示をされますので、細かく安神のクリーンセンターの方で分けている状態です。持って行かれた方は、対馬市民の方は分かると思うんですけども、そういう状況です。

清野委員長: 何か他にコメントありますか。ではオンラインから資源循環推進課様、お願い

します。

赤澤委員：すみません、聞こえてますでしょうか。

清野委員長：はい、聞こえております。

赤澤委員：県庁の資源循環推進課の赤澤です。ちょっと本日はそちらの方に行けなくて申し訳ありません。リモートの方で対応させていただいております。先程、分別とかそういったごみ袋の提案というのがありました、確かに良い案なのかなと私も思います。一方で1つ考えていけないといけないのは、例えば現地の方で、ボランティアの皆さんの方に回収をしてもらいましたと。そして回収をしてもらう時に分別もしてもらいましたと。それでは袋毎に色々こう分けていくと、そこまでしてもらいましたとなったにも関わらず、中に入っている資源ごみとして回収されたものの中に、実はちょっと何かしらのリサイクルに回せない様なものがあったという事になってしまった場合は、結果的にこれはまた処分しないといけないという事になるとそういう欠点もあるのかなと思います。特に漂着ごみに関しては、普通の家庭から出るごみとは違ってちょっと劣化が激しいものがあるのかなと思われま。従って、一概にちょっとカテゴリーの方の分別と、それをそのまま漂着ごみの回収、ボランティアの回収の方に持ってくるというのは、ちょっと少し無理が出てくるのかなと思います。当然そういった劣化とか何かを考えなくても良い様なものを、例えば瓶、缶とプラスチックとかそういう風な分け方をすると考えれば、また少し変わってくるのかなと思うんですが、ボランティアをしてくれた方に対して過度な負担をですね、強いてしまうというのはちょっとまた大きな問題なのかなと。またしかも、その回収したごみはせっかく分別をしたのにそれが最終的に燃やされたと、埋められた、リサイクルに回らないという話。それを知っちゃうとまたせっかくボランティアした、分別をしてくれた人にとってもちょっとショックを受けてしまう様な話になってしまいますので、そこはちょっとバランスとかですね、そういったものを少し考えながらやっていくべきなのかなという風に私はちょっと今聞いていて感じました。以上です。

清野委員長：ありがとうございました。結構今、リサイクルとかアップサイクルとかいう中で、そこは大事な局面に入ってきていて且つ、最近高校生が研究したいテーマにプラスチックごみの劣化というのが出て来て、多分社会的にも関心が高いところになっているかと思えます。そうしたらですね、では中山先生お願いいたします。

中山委員：今色んなお話をいただいて、生活ごみと海ごみが繋がっているというところを認識していただくというのは、私も大変重要だ認識しているんですけど、その一方で先程福島さんからも少しお話があった様に、対馬の場合は集めているのって、もちろんボランティア

の方もたくさん集めておられると思うんですけど、結構漁業関係者の方が回収にすごく貢献されていると思うんですよ。もちろん経費がかかる事でもありますし、そういうごみの回収事業をやる時に漁が出来ないので、その為にももちろんお金をお支払いして集めてもらっている事はあるんですけども、ただその分、例えばさっき話がありましたけど、漁業者の方をお願いする時はきちんと分別しろとかですね、そういう風に結構厳しくやられたりして、漁業者の方も大変ご苦労されていると思うんですけど、その一方であまりその事が伝わっていないというか、逆にここの感想を見ると漁具が多いとか、漁業者にもっと教育しないといけないとかそういう風にマイナス側の事が多いんですよ。でも本当は漁業者の人って、もちろん漁具が流れる事もあると思うんですけど、それより多分集めている量の方が多いと思います。実はですね、昨年環境省が日本全体からどれ位海にプラスチックが流れているかという調査をして、我々もその中でですね、漁業関係の調査に参加したんですけど、全体で最大で1年間2万7千トン位出ているという風に、これもう公式発表されています。我々の推計だと、漁業系のごみが最大で2千5百トン位だから、10分の1位。日本のプラスチックの内の10分の1位は漁具かなど。多めに少し見積もっているのも、もしかしたらもう少し少ないかもしれないんですけど、一方で集めているごみが5万トン以上なんですよ。6万トン位だったと思うんですけど日本全体で、漂着ごみ。その中で多分漁業者の方が集めたごみってすごい多いと思うんですよ各自治体さん。もちろんボランティアで集めているのもあると思うんですけど、漁業者にお願いしないとやっぱり集まらないところがあると思うので、そういう風に考えるとちょっと漁業者の方の、ごみ回収への貢献を知ってもらう事も必要なんじゃないかなと思いますし、実はそういう今、調査をしていてここに後ろにいる学生がその研究をやっているんですけど、その件でちょっとまた色々対馬市さんとかですね、それからCAPPAさん、それから漁協の方にも少しお話をお伺い出来れば良いなと思っています。なので、必ずしも島民の関係というのはネガティブな側面だけではないという事は、もっと伝えても良いんじゃないかなという風に思いました。

運営(吉野)： すいません、補足の方でいいですか。先程の説明の中で、色々分別を現場のボランティアの方にしていただくのは、というお話があったんですけども、今現在、私達が環境スタディで、ボランティアでしていただいている時に時間とか相手の方々の幅とかにもよるんですが、分別作業をしていただいています。小島委員さんが今おっしゃっていた様に、もうその分別作業場に分別の分かる波田と原田と2名待機しておりまして、ある程度分けていただいたごみをその場所に運んで来ていただいて、これはこっちの袋で良いです。これはこちらで預かりますという作業をしております。その中で、今提案の中でありました対馬市のボランティア袋が黄色い文字で書いてある1つの種類なんですけど、その1種類のごみ袋の中に、これにペットボトルを入れたら、1回入れたらこれはもうペットボトルの袋にしてください。こちらの方には、では発泡スチロールを入れたら発泡スチロールだけ入れてください。廃プラスチックなら廃プラスチックだけ入れてくださいという様な、そういっ

た指示というんですか。団体様によるんですけども、そういった形で軽い分別をしていただい
てごみを集めております。トン袋にある程度、これは発泡スチロール、これは廃プラスチック
という様な形で分別したものを中部中継所の方々に取りに来ていただいて、運んでい
ただいて。やはりそれはある程度リサイクルプラも分別しているんですけども、1回中部
中継所の方で、バーッとやっぱり確認の為にばらされるのは、もうばらされるという事でど
うやってしてもばらしていただいて、そこでまた作業員の方々に改めてしていただくとい
うはあるという事なんですけど、そういった作業をしている中で、黄色のボランティア袋を使
っているのを色んな種類に分けると、拾う方が分かりやすいかなという形での提案
という形でもこちらはありまして、後、今中山委員さんがおっしゃってございました漁業者の
の方々が集めていただいたごみに関する普及啓発に関しましては、私達のお海ごみ授業の中
で漁業者は、飽くまで出したいとだしている、わざと捨てている訳ではないという事は授業
の中でお伝えさせていただいておりますので、そういったものがやっぱりちょっと届かない
部分があるのかもしれないですが、弊社の授業の中ではそういったところは、漁業者の方々
と一緒にごみ清掃していますという事は授業に入れておりますので、より一層またそれを
多くの方々に伝えられますように、伝え方もちょっと考えていきたいなと思っております
が、すいません、補足として伝えさせていただきました。

清野委員長：ありがとうございます。すごい大事なところをありがとうございます。中々今
まで、その辺突っ込む機会がなかったりとか、後は先程、県の資源循環課様からも声があ
った様にちょっと私の頭の中では、対馬だったら出来ていたりするけど、そうじゃない所では
無理かもとかですね。やっぱり対馬が積み重ねてきた時間というのは、今日の後半の議論で
もしようと思えますけれども、それだけごみの内容について関心を持ち続ける方が多くい
るという事と、後、テキパキ動けるというチームが出来ているというのものもあるかと思
います。それからぜひですね、今日橘様にもご意見いただけたらと思うんですけども、対馬の漁師
さんがずっと海の現場で色々種類とかも見ながら分別されている事とか、それからもうチ
ームワークで現場からすごい効率で回収していただいているというのもあると思
いますので、その辺りもですね、もっと発信していただいたり、共有していきたいと思
います。では橘様、いかがでしょうか。今、漁師さんがずっと現場で拾っていただ
いている話、それとか選別についてプロフェッショナルでおられる点、ご指摘ありま
したら。

橘委員：あんまりプロじゃないんですけど、分別もですね、昔何年前か覚えていない
ですけど、10年前位はあんまりこれはこれにしてくれとか少なかったと思う
んですけど、最近では分別が多くなったというのは確かです。それと、車で行
けない所が多くなったし、後、高齢者が多くなって人員が減ったというの
もあります。それ位ですかね。

清野委員長：ありがとうございます。それはやっぱり長年続けている間に、段々皆
さんやり

方が洗練されて来ているというか、熟練されてくるという事ですか。

橘委員：もう結構、この間もちょっと掃除させてもらったんですけど、廃プラと、もう木はあんまり持ち運べないので木は取らない様にして、廃プラと発泡とペットボトル 300 袋位ですかね、回収しました。40 人位ですかね、3 日間。

清野委員長：ありがとうございます。何か今回の協議会で、やっぱり色々な方が参加していただいているというのは、そこもすごく重要なところかと思いました。そうしましたらですね、議論は尽きないんですけども、今日まだもう 1 つ議題がございます。そして会議が始まってから 1 時間半が経っておりますので、4 時 10 分まで休憩といたします。

(休憩)

清野委員長：それでは休み時間終わりました、再開したいと思います。5 時には終わる予定で、50 分ございます。それではですね、皆さまよろしいでしょうか。今日のですね、議題の 3 番目になります。対馬市海岸漂着物対策のあゆみという事で、膨大な資料を作っていました。それではお願いいたします。

運営(山内)：対馬 CAPP の山内と申します。よろしく申し上げます。議題に基づきご説明をさせていただきます。本資料は、対馬市が合併前の旧町の頃から漂着物対策を取り組み始め、現在までの主な出来事を時系列でまとめたものです。一般的な年表形式で、行政機関、民間の漂着物対策を年毎に重要な施策、出来事、行事、業績等を記載しています。年表といたしましても、文章だけのシンプルなものから、最近は写真とかイラストを駆使したデザイン性の高いものまで様々あります。今回は出来る限り、漂着物対策の記事や写真を駆使してビジュアル性を出しております。また、重要な事業や補助金の名称とかは赤文字で表示をしております。本協議会資料の 23 ページから 40 ページまでありますので、これをつなぎ合わせると 2 メーター以上の長さになってしまいます。また、編集の都合や印刷の都合上、罫線とかが切れているページもあります。また、レイアウトや文字ドレイが揃っていないところとかもありますけども、その辺はご了承いただければと思います。また、合併前の旧町誌とか旧町の広報誌、それから対馬市の広報誌、新聞記事の他、関係者への聞き取り等を参考に作成をしておりますので、事業内容等、出来事等についても不備なところもありますが、その辺につきましては委員の皆様からの指摘等を受けた上で、今後修正をしていきたいと思っております。本資料は、今後も続く事業の取り組みや成功、失敗等を記録していく為、実際のところこれはまだまだ未完成ですが、対馬市の漂着物対策のあゆみが、ここにいる漂着物対策に携わる方が歴史を知る為に重要な資料となれば幸いです。今から、対馬における漂着物対策を振り返りながら、意見やエピソードも踏まえ、資料の説明をします。これを 1 つ 1 つ

出来事を説明すると、この協議会運営に支障をきたしますので、主なもののみ説明したいと思います。また、出来事の詳細の補足事項については、弊社の上野、末永の他、委員の皆様、市役所の担当課からも説明をお願いしたいと思います。本資料に関するご意見やアドバイス等いただければ、今後の年表作成作業にも活かしたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。それでは23ページからになります。対馬市では合併前の旧町時代から各漁協単位で浜掃除が行われていました。その後、海岸漂着物が目立つようになり、平成12年頃に防衛大学校の山口教授、これ当時の教授さんだと思うんですけども、全国の海岸、7海岸で調査をされ、対馬の海岸の方にも漂着ごみの調査に来られています。この頃を振り返りますと、私が旧豊玉町役場の職員として、技術吏員として入所した平成5年から10年頃までは、豊玉の海岸には目立つ漂着ごみはありませんでした。それ何でかなと思った時に、よくよく振り返れば平成7年から平成10年までは水産課に所属しておりまして、水産の事業とまた技術吏員でしたので、漁港施設とか海岸保全施設の設計に従事しており、毎日現場の方に行っていたという事で、色々な海岸とかの状況を見ていた事もあって漂着ごみがなかったという印象があります。その間に、世の中の動きを見れば、印象深いのはナホトカ号の重油流出事故とかがあって、対馬の海岸にも重油が漂着しているという事から、漁協の職員さんとか漁師さんとかにお願いをして、重油回収に従事した事や、諸外国からの不審船情報も、漁協さんとか漁師さんから多くあって、難破した船の残骸と思われる物品を回収した事もありました。個人的には、平成10年以降にやはり漂着ごみが目立ってきたのではないかなと感じております。その後ですね、平成15年度から旧上県町に、韓国からの国際交流員として在籍していた職員の提言により、住民ボランティアと韓国の大学生が一緒になり海岸清掃を始めたのがきっかけで、現在続いている対馬市主催の日韓市民ビーチクリーンアップ事業に繋がっています。平成16年3月に対馬市誕生後も、行政、民間において島ごみサミットや日韓学生会議といったワークショップも開催されるようになり、多くの学生や日韓市民が漂着ごみ解決に向けた取り組みに参加するようになりました。併せて、ボランティア清掃と同様に現在も続いている大きなイベントになっています。24ページから26ページをご覧ください。この頃、平成17年から行政機関において長崎県内の市町から、漂着物対策の提言とか提案が国の方に提出されているようです。関係省庁とか、自民党を中心とする漂着ごみの勉強会や特別対策委員会等が開催され、漂着物問題がクローズアップされる様になりました。平成19年度から平成22年度には、環境省による漂流漂着ごみに係る国内削減方策モデル調査が実施され、その間に平成21年7月に海岸漂着物処理推進法が制定し、その対策となる基金として地域グリーンニューディール基金事業、海岸漂着物対策補助金が成立しております。そのグリーンニューディール基金の内、海岸漂着物に対しては全国で約48億円。内、長崎県に約13億円、対馬市に約8億円の漂着物対策予算がつき、約3年間でありましたがこの基金を活用して、対馬市全域の漂着物の回収処理、普及啓発、また発泡スチロール油化装置等導入のリサイクル再生事業等にも活用されています。この間、私が漂着物担当で環境政策課に在籍していましたので、このグリーンニューディール基

金の活用の間、自民党本部や環境省の部署、それから環境省主催の担当者会議、長崎県の漂着物対策協議会等に緊張しながら参加して、対馬の状況説明等をしたのも今では良い経験となっています。その後は国の予算の関係上、漂着物対策補助金予算は年々縮小されている傾向にありますが、行政、民間で創意工夫しながら漂着物対策を継承していると思います。ちょっと早口でしたけども、23 ページから 25 ページにかけて説明を終わります。もし補足事項とかちょっと気づかれた点がありましたら意見をお願いします。

清野委員長：ご説明ありがとうございました。今まで対馬市さんにぜひ、経緯をまとめていただければというご提案をこの協議会も、私もさせていただいてたんですが、まさかこんな年代記の様なすごい表が出て来るとはという事で感動いたしました。後、ちょっと教えていただきたいのは、すごく重要なのは今日のご説明の中で、当時の担当者でおられたという事は、何か時代の承認者みたいな感じに今なっていて、多分海ごみって、今すごい注目されているけど、海ごみがある事自体を言えない位、自治体さんがちょっと迷っていた時期に、対馬市の皆さんがこういう現象があってというので切り込んでいった時代を見ていたという承認になるのかなと思いました。ではちょっと私からの感想申し上げてしましますが、委員の皆様いかがでしょうか。では、小島委員さんお願いいたします。

小島副委員長：こんな労作をありがとうございます。冒頭にお話があった様に、どんどんこれを追加して行って CAPP のライフワーク的な部分にもなると思うので、年表ではなくても色んな事をアーカイブしていくというのは、すごく大事な事だと改めて思いました。今の山内さんからの前半のご説明のところ、長く海ごみの現場に関わってきたものとして、すごく大きな出来事だったという事を少し強調してご紹介したくて手を挙げました。特区申請、長崎県と対馬、壱岐、それから新上五島、五島の自治体が一緒になって、内閣府の構造改革特区というのが、皆さん何となく覚えていると思うんですけど、あれの第 8 次の特区に申請をされたんですね。当時内閣府の対馬や長崎からの担当した人が、環境省から内閣府に出向されていた方でした。中身自体は、特区には馴染まない、特区という枠組みには馴染まないものだけでも、ここまで申請に至る位そんなに大変なのかという事で視察にいらしたそうです。現場を見てあれまたビックリみたいな、本当に驚かれて、これはやはりきちんと国が何らか動かなければいけないのではないかと。それによってそれまで関係省庁の担当会議というのは、対策を話し合う為の会議ではなくて、国の様々な省庁の担当課が海のごみに関して、我が省はこういう事をやっていますとか、こういう予算を付けていますという様な情報の共有の為の集まりで、それが年に一度予算編成が終わった後に開かれるというものだったんですね。でも、特区申請が契機となってきちんと国が動こうという事で、課長級にその会議が格上げされました。その時私共は、こういった対馬等からの動きと並行して、やっぱりこの国として法整備をしないと行政の方々が動く根拠もなければ予算もつかないで、何とかそこを動かす必要があるだろうという事で、日本海側の議員の方等を中心

に、とにかく現場に行ってほしいとか、こんなに大変だという事をロビー活動したんですね。それが実りまして、自民党に勉強会が発足いたしました。その後すぐ、三役の会議を経て特別委員会という事になりまして、対馬市さんや長崎市さんからも、その何回目かの会議に現状を伝えに当時の担当課の方に来ていただいたりしたんですけれど、そういう時に全部聞かれて、どこの人に来てもらうのがいいですかという様な裏の話があって、何をおいても対馬の方には来ていただいでくださいという様な事をこちらからお願いをしたという経緯がございます。自民党発でしたけれども、それが議員立法という形でまず法整備をしないと動かないねという事で、前の自民党の最後の時の国会だったんですけれども、全会一致で可決をして、2009年の海岸漂着物処理推進法というのが出来る事になったんですね。それで法律が出来ましたので、国が直接計画を持つのではなくて、国は方針しか示していないんですけれども色々な事が決まった事で予算も付いて、それぞれ何とかしたいけれど自分達の手持ちの予算では出来る事に限界があるという事で、すごくお困りだった地域の方々を始めとしてその予算を活用しようという事が、今に至る動きの非常に大きな一歩になったという次第です。

清野委員長：ありがとうございます。これすごい重要なところで、ぜひですね小島さん、この民間団体で、CAPPАさんのところもあるし、後、今のお話で言うと2004年の島ごみサミット対馬会議とか、この辺りもNGO提案というか。

小島副委員長：JEANが他の任意団体と一緒に主催をして、当時の対馬の行政の方にご相談をして、対馬でやらせて欲しいので協力していただけないかという事で、予算は自分達が集めてきた自己資金と助成金でやりました。

清野委員長：そうですね、結構日本の政策形成の中でも重要なタイミングだったと思いますので、その辺りもぜひこちらお忙しいと思いますが、ヒアリングを受けていただき、その部分も充実させていただけるといいのかなと思います。この後、ちょっと行政委員さんにもご意見伺いたいと思っておりますが、国の動きとしてバックグラウンドとして1997年に海岸法の改正というのがあって、99年、海岸法を改正する時に環境とそれから地域の住民参加というところが入ってきて、それで浜掃除の世界というのがやっぱり法の目的の中で、環境というのが入った事によって、大きい意味でその海岸の中でやらなきゃいけないという事になりました。それから2007年に海洋基本法というのが制定されて、これも議員立法でした。つまり、海洋とか海は議員立法しないといけない位従来の法律の中からは、政治的なあれがなくて、もう沿岸の人達が要望してというのがありました。それから2007年の海洋基本法とか2008年の海洋基本計画の中で海ごみの話が入ってきたり、国民の役割でごみを拾うと書いてあって、結構当時はどうなのかという話がある位で、やっぱりここで小島さん達がずっと国会の方だとかそういう国、行政の方にも働きかけられて国家的な一種課題にな

ってきたというのがあると思います。だからそういうバックグラウンドのところの動きがあり、そこにやはり対馬市がすごく丁寧に対応して下さった事で制度化出来たというのがあるかと思っています。それで今おっしゃっていた2009年の海岸漂着物の、ここも議員立法になるかと思っています。そういった点で本当に私は対馬市の動きをもっと強調していただいても良いのかなと思っています。では行政の委員の方も、ぜひこういった経緯についてご存じの事とか、ご意見等ありましたらお願いいたします。では、村井さんお願いします。

村井委員： 市民生活部の村井でございます。年表を作っていた事によって、今、例えば当時 JEAN の小島委員さんが全国の中で対馬に来ていただいて、そういった海ごみの活動を始めていただいたというのは、そういう事がよく分かるんですけど、今後こういう年表を見ながらそういうお話をどんどんして行って、歴史というものをやっぱりもう1回考え直さなきゃいけないなという風に思うと同時に、本当に今感謝の気持ちが改めて湧いて参りました。そうですね、先程、清野委員長さんともちょっと雑談の中で話をさせていただいて、もっともっと昭和の代からだったらどれ位だったのかという事とかも今後こういった形で拾い上げていくべきだと思うし、今スタディツアーの中で豊玉町の佐保のクジカ浜という所をよくお使いいただいて、私が佐保という所が本籍で、住んだ事はないんですけども、おじいちゃん、おばあちゃんがいた関係でたまに幼児の頃から行って、海遊びをしていた、親に連れて行ってもらったのがクジカ浜だったんですけども。だから今からもう半世紀以上、私今60歳ですので、5歳6歳、7歳8歳とかその辺の学校に行く前、それから学校始まってからも遠足で皆さん使って、学校が使ってくれたりしていましたので。なので、50数年前はですね、今思えば西側なので確かにごみが全然なかった訳ではなくて、ハンダルのそういったペットボトル、プラスチック類とか、あとは漁網類とか、木ですね。材木もどこかから流れて来たものとかが主だったなという。今みたいに発泡なんかもごっそり無いし、このプラスチックの球なんかも無かったんですけども、本当にぽつぽつとある中で、唯一コールトールというのが、当時子供の時に必ず海に、そこに連れて行ってもらえば、もうどこかで足に踏んだり、海水パンツについたりというのが、匂いがコールトール一色だった時なんですよ。でも海は綺麗でした。もちろん綺麗でした。海藻類なんかも、时期的に口開けがあれば、その口開けで色々なものを獲ったりとかして、それが生計になっていた時代ですので。それが今ああいう状況で、そこが環境ツアーの1つのコンテンツになっているというところが何か寂しい気持ちが複雑だということを非常に感じたところであります。JEAN さんが入ってきてくださって、色々してくださっている話からちょっと思い出したんですけども、ちょっと逸れたかもしれませんが、1つそういう事があって、今50年以上経ってしまえばこうなんだという。当時はただ西なので、ほとんど地元のものというよりも、海からやっぱり別の国から入ったものの方がほぼ全部だったかなという風に思っております。後は、漁師さん方も当時は必要ないものは海に放っていたでしょうから、そういうものはもちろんあったでしょうしね。すいません、意見になりませんが、そういう思い

出です。

清野委員長：ありがとうございました。今みたいなご意見、非常に重要で海洋汚染って、多分さっきのコールタールとか、ああいうオイルボールという事で、それに基づく海洋汚染の国際条約とかがあったんですけど、まさかこの大きいものがどこどこ出て来る時代になるとはという事で、海洋汚染自体の国際的な対策の、対策すべきものの編成という点でも、対馬の国際航路も通ってしまっていて、お隣がいるので非常に重要な証人という風に思います。それからクジカ浜の話ですけれども、私もそういう風になっちゃってからしか行ってないので、あそこを観光地だったとか、海水浴に行っていたとか言っても半信半疑だったんですけど、今日、村井委員さんの証言で、今ちょっとがけ崩れたり廃墟化してしまっているんですけども、そういう賑わった場所をまた再生していきたいという様な、元に戻したいという想いを新たにいたしました。後また、旧町時代の資料については、多分色々、町内会だとか議員さんとかが旧町の合併前のところで、話題にされてという事だったというので、この年代期の更に前史というのがあると思うので、私は、そこはすごく重要なところですので、色々な方のご協力いただきながら、そして今のような証言をいただけたらと思います。ありがとうございました。小島委員さんいかがでしょう。

小島(博)委員：今ですね、CAPPAの方の方からこの年表ですかね、説明をいただいて、私も、ナホトカ号の重油の事故の時ですかね、そういったのがちょっと懐かしいなと思ったんですけど、もう毎日毎日ですね、海岸に行って重油の回収というのをやりました。丁度あれが春先だったと思うんですが、当時は丁度ひじきが伸びている時期がありまして、ただもうひじきも全て油にまみれまして、ひじきごと回収すると、重油回収もドラム缶位、集めても足りないぐらいの重油があつて、もう毎日毎日本当に大変な事だったなと思っております。またそういったものの年表をですね、こうやって残しておく事で、先人の方達がそういった問題にどういう風に取り組んだ、また解決していったかというのを後々に残していく必要があると思いますので、こういった取り組みは非常に大事ななところだと思います。以上です。

清野委員長：どうもありがとうございます。やっぱり世の中的な情報の中で、行政の方が持ってらっしゃる行政知と言われるものが意外と字になっていないという事が最近課題になっておりまして、行政の方がやっぱりそういう問題にどうやって取り組まれたとか、当時現場が抱えていた事は非常に重要だなという風に思いました。多分、小島さんもナホトカ号の事とかで色々市民活動の連絡会議みたいなのが出来たと思うんですけど、それもやっぱり実は絡まってくるのかなと思います。いかがですか。

小島副委員長：ナホトカの事故、1月2日に起きてるんですね。福井の三国の沖で沈没し

て、舳先が島根の方にひゅーって流れていって。だから多分、舳先とおっしゃったので、こっちまで広がった油が来るのにそれだけ時間がかかったという事だと思います。私は、全国のクリーンアップの仲間が三国とか京丹後とかあの辺りにいたので、すぐ連絡を取って、東京でお金集めて持っていくというのと、他の生協系の食べ物の宅配をしているところが、生産者さんが向こうにいるという事で、ボランティアバスを出す応援をしたいと言われてまして、何回か首都圏からボランティアバスを出して、ボランティア志願者の方達を向こうに連れて行って、自分も、福井と京都の2か所にずっと入ったという事がありました。その時、東京では例えば海鳥の被害とかがあったので、野鳥の会とかWWFとか、あと獣医さんのボランティア団体とか、油に被害がある、環境への被害という事で、いくつかの団体が情報をきちんと収集して、科学的にこれからどういう事が予想されるのかとか、現地に行って油を取る以外に出来る応援があるんじゃないかという事で、その油汚染に関する市民のネットワークが立ち上がって、JEANもそこに参加して、その後、東京湾で起きたダイヤモンドプリンセスの軽油の事故とかですね、いくつかでその情報発信というのはしたという事があります。

清野委員長：ありがとうございます。今の話も結構重要な証言で、丁度法律改正とかをやっていたり、法律を作ろうという時にナホトカ号の事故があったり、海ごみが増えてきて、それでやっぱり各地域で市民活動としてやっている方と、それから、東京とか大阪でやっている人と、各地の出会いというのがあったりとか、後、浜掃除で頑張っていたら、こういう状況になっているのかというので、重油の問題と海ごみの問題があって、漁村のその状況を、そういう対話をせざるを得ない状況になって、非常に長い海岸線で、冬に取り組みされている状況に多くの市民活動の人が驚愕してっていう、1つのエポックだったと思います。それから、今丁度思い出したのは、さっき阿比留課長が京丹後市から視察という話もあったんですけども。ナホトカ号の時はやっぱり京丹後も、非常に深刻な被害も受けていて、それで海岸環境問題っていうのもあると思いますので、20年以上の時を経て、それぞれの場所がそれぞれの対策をしてきたと思いますけれども、対馬にまたそういった皆が集まってというか、情報共有しながら進んでいくのかなという事が思ったところです。他にいかがでしょうか。事務局さんの方からもいかがですか。これだけ作られる中で、色んなまだお伝えしたい事もあるかと思います。

事務局(山内)：色々補足説明等、ありがとうございます。同じ24ページから25ページ、26、27ページにかけて、今度は民間の方の動きを紹介したいと思います。ちょっともう時間の方があまりないので、かなり省略をするかもしれませんが、よろしくお願ひします。この頃はですね、環境に関する色んなNPO団体や民間団体が設立され、活動を始めております。この中で25ページの1番下に、対馬市立加志々中学校が平成22年の3月なんですけども、漂着ごみ禁止ポスターでゴミゼロ長崎優良団体賞を受賞しております。市

内の小中学生、高校生が漂着ごみ問題に興味を持ち、色んな活動を通して課題解決に向けての取り組みは現在も続いており、弊社の海ごみ授業や海岸清掃には多くの子供達が参加してくれております。27 ページをご覧ください。27 ページの上の方の、平成 25 年 4 月に美しい対馬の海のネットワークが発足し、民間における漂着ごみ対策が更に発展する礎となりました。その後、29 ページになりますけども、平成 29 年 6 月に美しい対馬の海のネットワークを継承する様な形で、行政、民間を繋ぐ中間支援として一般社団法人対馬 CAPP が創立し、現在の活動に繋がっております。創立まで幾度となく関係者間で論議があり、協議内容等についても様々なご苦労があったとお聞きしております。この中間支援設立に関しては、亡くなられた糸山前委員長さんの方から、漂着ごみをステークホルダーとしたプラットフォーム作りを提言されておりましたので、中間支援組織が出来た事で 1 歩進んだ形となってきました。その後、平成 25 年から対馬市の業務委託により、民間の会社にはなるんですけども、日本 NUS 株式会社に対馬市の漂着物対策推進協議会の受諾を受け、本協議会が開催されております。その後、平成 29 年度からは弊社が本協議会の運営業務を受諾し、現在まで様々な課題を議論しております。続いて 30 ページをご覧ください。30 ページから 40 ページについては、平成 30 年度以降の色んな出来事を表示しております。平成 30 年以降は、漂着ごみの回収処理、リサイクルについて、また普及啓発事業の取り組み、それからレジ袋削減、SDGs 推進、海ごみアート等、数多くの事業が展開されております。回収処理については、平成 20 年の半ば頃までは北九州市まで海上輸送をし、漂着ごみの処理を行っておりましたが、島内で処理する形にシフトをしていきました。併せて、民間企業の漂着ごみ視察も多くなり、化学系の企業、商社などが漂着ごみの内、廃プラスチック類をリサイクルした商品化をする等が始まりました。併せて、各廃棄物処理メーカー等の処理機械等の調査研究も盛んに行われ、本協議会において様々な議論が展開される様になりました。特に処理機械導入及びリサイクル方法については、先に導入した発泡スチロールの油化装置について試行錯誤したこと等から慎重に行われた様でした。処理機械導入後も処理方法については、処理方法の他、処理物のインゴット化やペレット化等、まだまだ関する課題があり、今後も本協議会において議題に挙がる事と思います。ここ数年は SDG s 課題観点からも、漂着物、水産事業の他、漂着物対策の先進地として、国の機関や県外の自治体、企業からの視察の他、国際的な海ごみシンポジウムの開催等の事業が多くなってきました。また、漂着物アートといった新しいジャンルも誕生し、漂着ごみに対するイメージも変化しつつあります。しかしながら、本来の漂着ごみ対策の目的は、対馬の海岸から漂着ごみを無くし、綺麗な海岸を取り戻す事だと思っております。重要なのはごみを拾う、ごみを出さないといった当たり前の事でも難しい所作だと感じております。駆け足でいったので最後になりますけども、個人的に本資料年表は、事業の記念誌や案内の冊子、またインターネット等の公式ホームページ等で掲載する、また博物館等の施設に提示する等、様々な用途が出来ると思っております。対象者に対して特に訴えたい出来事は何なのかを吟味し、選別していき、更新性を意識していきたいと思っております。

この年表を作成してからも、漂着ごみ対策の事業の取り組みや成長は続いていくと思います。年表作成した後も、追加や更新が出来る様な仕掛けを考える事も重要である為、先程申しあげましたホームページ等、デジタルツールを活用したり、素材を再編集、管理出来る様に仕組みを構築していきたいと思います。以上、駆け足になってしまいましたけども、時間の都合上、全部説明することは出来ませんでしたので、皆さんそれぞれ目を通していただいて、お気づきになられた点とかありましたらお願いします。

清野委員長：いかがでしょうか。はい、まだ少し時間がございます。犬東さんどうぞ。

犬東委員：この年表を見ていて私が思い出した事が、漁具がですね、随分変わってきて、私達が子供の頃は木箱を使っていたというのが、それが私が20代の頃も木箱だったんですよ。だから、中々発泡スチロールとかが手に入りにくかったし、丸いブイは真珠養殖場にある位で、珍しいものというか高価なもので、それが浮いてたら漁師さんは欲しい。簡単に自分の漁具が手に入らないので。そういう時代だった。その反面、船にペンを塗る時のペンキの缶とかというのは、その場に捨てたままとかというところが、私が36歳で女性部長になったので、その時はもうそういう状態でした。その話を漁協女性部の時に、せめてその辺りだけ、ペンの缶回収しましょうよという話をしたら、あなた1人がそんな事言ってもという事をもう本当、最初に部員になった時にですね、言われた事を覚えています。でも、今は違うじゃないですか。時代と共に変わってきて、20数年経って、そういう事をする漁師さんが極端に少なくなったし、落ちていけば回収して、ごみの回収事業にも出るわけで、変わったなという。漁具がというか魚を入れるものが木箱からまずは干していた。干して、日イカで渡していた。それが次が木箱になって、木箱で流通がしていた。次が、今度はもう干すのが嫌になって、女の人達も社会進出し出したので、共働きし出した。じゃあ、干さなくていい方法で木箱になって、木箱から氷が溶けにくい鮮度維持の為に、発泡スチロールに変わった。発泡スチロールで今流通しているけど、これから先はきっと段ボールになるんじゃないかなと思いますよね。段ボールになるだろうと。そういう風に移り変わってきて、漁師さんの心情も変化してきて、今、ごみを回収しに行く人が増えたとし、ポイ捨てが少なくなったし、船の上での缶コーヒーの空を捨てていたのを今、ごみ箱積んで持って帰ってくるという風に変わってきた。この年表にはないけど、そうやって人が変わってきたというのがあります。

清野委員長：ありがとうございます。今の年表も作りましょう。膨大な漁師さんの歴史なので、対馬海ごみ年代記みたいな何かそういう分野の急速に変わったけど、また自分達変わるかもという可能性もありますもんね。いや、ありがとうございます。他にいかがでしょうか。事務局からお願いいたします。

事務局(上野)：犬束さんから今そういう意見いただいてですね、私とか犬束さんとかね、その世代、エギなんかはまだ漁師の人たちが木で作っていた漁師だけのものだったんで、僕らの頃は、だからそんなに無駄に使わないし。それが変わって変わって、エギングとかスポーティーな感じになって、その歴史とかもですね、どこかにやっぱり今俺達が元気な内に、そういう資料館じゃないけど、そういう変わってきた道具とかですね。プラスチックになって今後、今言った様に段ボールとかそういう道具に変わるかもしれないみたいな未来の事も含めてですね、そういうのが出来たらいいなとは思っています。

清野委員長：ありがとうございます。これは多分対馬でしか出来ないですよ。そういう漁業も、それからエギも漁師さんが自分で特別の木から作っていたとかいうお話を、リアルタイムを聞いて、急速な生活の変化、それから産業変化があったという事になるかと思えます。どうでしょう、市役所さんにも結構これはすごい重要な資料だと思っていて、そういうどんどん追加していくっていう部分と共に、本なり冊子なりにもして良いものだと思いますし、そうしたらまたいろんなところで参考にしやすかったり、系統だって学べるかなと思いました。何かご意見がありました。では環境政策課様、それから次に、SDGs 推進課様の方もよろしくお願いします。まず環境政策課様から。

運営(阿比留)：ありがとうございます。もう本当に、対馬の海ごみた施策は発展してきているというところもわかる、すごく貴重な年表になってくるんじゃないかなと思います。併せて、やはり写真もいくつも入れていただいていますけども、写真とか、これからは動画の、そういう風な映像のアーカイブとして、このところが見たいと思ったら、ここをクリックすると写真とかもしくは映像、動画が見れたりとかいう風な、それこそ海ごみ情報センターみたいなのところに載せていただいて、そういう風な形で日本中の人、世界中の人が見れる様に、そういう風な形になっていければもっといいかなとも思いますし、やっぱりこれから先はそういう映像、動画もちゃんと残していくという風なところも必要じゃないかなという風に感じております。以上です。

清野委員長：ありがとうございます。阿比留課長には国際的なところも御尽力いただいて、そういう意味では、映像とか写真とかだと他の国の人も読めたり、自動翻訳があるといっても映像のインパクトあると思いますので、引き続き、これを今度国際でどうするかという、うねりにいよいよ入っていくタイミングになるかと思えますので、ぜひ実現していけると良いと思いますし、行きましょうという事ですね。SDGs 推進課さんとしてはいかがでしょう。こういう経緯があつての今日の海ごみかなと思うんですが。

財部委員：私もですね。以前、廃棄物対策課に短期間でですけどいました。その時に、今の阿比留部長、観光部長と一緒に仕事を、2人だけだったんですけど、その時に小島さんの

お名前だけはお聞きしておりました、実際お会いしたという事はないんですけども、その頃から始まったのかなって思っています。ただその頃はですね、久田の埋め立て場が燃えただとか、その煙が出てるっていう、そちらの方が大変ですね、海ごみの記憶が薄れてしまってるんですね。だから、こういう風に残しておくのは大変重要なのかなと私も感じますので、完成していただきたいと思っております。よろしくお願ひします。

清野委員長：ありがとうございます。廃棄物発火問題とかもあって、またそういう一般の他の廃棄物の歴史年表もあつたりとか、ありがとうございます。やっぱり私は、行政の方の、そういう行政知というのは本当にそういう形で残していただく事によって、どういふ風にまた取り組めば良いかと、ゼロから始めるところもあるでしょうし、また、こうやって改善してきたんだから、この先もきっと頑張れば出来るかもと思えるようになる資料かと思ひます。後、SDGs 課さんの方にもちょっと出来ましたら、やっぱりこういう資料も出来ましたので、これもちょっと短くまとめたものでも、色々市役所の中で作つていただいて、私は、日本一海ごみがあるということで誇るんじゃないで、もっとこういう歴史を持つて今日があつて、SDGs とか持続可能性とか言葉がない時から、皆さん、浜掃除から始め、コミュニティ活動から始め、ずっとこれだけの歴史を対馬の人皆で作つてきて、それから対馬以外の小島さんとか、色々な方とも繋がつて、作つてきたという事自体が無形文化財的にすごいと思ひているので、ぜひそういうところを誇りにするっていうのをまた追加していただけたらと思ひます。では、いかがでしょうか。村井さん。

村井委員：委員長おっしゃつていただいた様に、良いですね、今の最終目標というか、歴史の1番大事なところという部分で、CAPPA さんの方から更にそういったスタディツアーになると、そういった企業の方とかセクション毎の繋がりがあつて色々な効果が上がつてくると。それと今、1.5 倍もこうやってそういうツアーに来られる方々が増えている。そこには、地元のもちろんシーカヤックとかもそうですけれども、先程初めて聞いたんですけども、えんさんがプラスチックで弁当箱というのを、変えられたという事なんか、当時、その頃からもうそういう事が動きとしてあつて、今、1つの対馬に呼び込むという事なので、これは経済が成り立たないとやっぱりダメなわけで、それが、そういった形で、CAPPA さんがこう1つ上手く表に出て来ずにコーディネートしていただいて、色々なところに、こういう団体さんだつたらぜひ、えんさんところに行って、海遊記を体験しませんかとか、こうやって害から財へという、ジビエ関係ですね。ああいう獣のそういったものが出来ますよここはっていう様な、そういうその流れを多分、観光とか経済とかいふ部分で繋げてこれたのが、今繋がつてきている CAPPA さんじゃないかと思ひますよね。だから、そこはそこで大事にしながら、最終的には今、清野先生が言つてくださった様なところに繋げていくのが、これ美化するわけじゃなくて1番大事なところかなと思ひますので、経済は経済なんですけど、それはその為だけじゃなくて、対馬の海ごみ

とか生活ごみとかを、綺麗な自然にしていくんだという歴史があるんだという事にやっぱり繋げていくのが大事かなと思うんですね。先程ごみ袋の話がありました CAPPa さんから、あれも色んな意見ももちろんあると思うんですけど、要は、まず住民、市民に浸透してないんですね。私達のこういった活動とか行政の動きとかというものを、もっともっと分かってもらって、分別にしても、そのやり方は今おっしゃるように3分別するとか、1個でいいからそこで説明しながらスタッフが意味を教えてあげるとか、色々あるんですけども、そういう風に島民になぜ分別しなければいけないとか、そういったところをです。周知したり、そういったところが1番大事かなと思っていて、そこから SDGs とかにも繋がっていったりするのかなと。ちょっとうまく言えないですけども、そういった事です。最後は、清野先生のおっしゃった様な、もう一回言っていただいていた方がいいですか。

清野委員長：忘れてしまいましたけど、今、やっぱり本当に海ごみや廃棄物を直しているところにおられる村井委員さんが、ずっとそういう合併前の浜掃除から見られてきて、それで SDGs に繋がると言っていたいただいた事が、私は結構今日は良かったなと思います。つまり、SDGs で言っている海ごみの話と、対馬の皆さんがずっと歴史的に積み重ねてきたものとか、あと市民に何を伝えればいいのか、海ごみ問題は市民とどう繋げればいいのかというのは、この協議会の中でもずっと議論になってきたので、今伝えていただいたところであると思います。ですから、ぜひこういう協議をするという事であるとか、後 CAPPa さんの、それから上野さん達の美しい対馬の海という事での団体が出来て、それをやっぱり中間支援組織にしていくというその制度ですね。それは、これだけの大きいごみ回収費用がありながら、もう拾って終わりになっちゃうのか、人材育成していくのかという事で、私は、対馬市さんの市の行政としての決断も大きかったと思うんですけど、やっぱり地元の人材育成をするのに、きちんと今もそうです。他の漁師さん達もそうだし、やっぱり市民の人とのそういう事、何か一緒に学んでいくというところがあったと思うんですね、ですからそれを、今日村井委員さんがおっしゃっていただいた様に、もう一度海ごみ問題で、対馬が海ごみで大変な島というだけじゃない。それをどうやって対馬市民の人と対馬市の行政と関わる人が、ずっと長い時間かけて解決しようとしてきたのかというのを、長い物語として、中々ネバーエンディングストーリーではありますけれども。皆で取り組んでいくという勇気をいただいたかなという風に思うところです。ありがとうございます。そうしましたら、すいません。ありがとうございます。上野さんどうぞ。

事務局(上野)：これ最後に一言だけ言わせてもらいたいんですけど、年表の意義と言いますか、これの大きな1つの理由はですね、CAPPa が出来るまで、この地元の漁業関係の人達、それとボランティア関係の人達、それから有識者の方々が集まって、この地元でこういうのを作る事はですね、さっきおっしゃったようなものすごい大切な事でもあるんですが、一昨年、水産課課長、水産課の方にも加わってもらって、今回 SDGs 推進課にも、

財部課長にも加わってもらって、川口さんにもグリーンブルーツーリズムではなくてブルーオーシャン対馬の代表としてですね、加わっていただいてですね、この歴史ずっと長い事続いていて、中間支援組織というのが出来てですね、どうも最近色んなところが入って来て、中々入ってくるのが、情報が分かりにくいと、前回、第1回目に川口さんに説明してもらったんですけど、そういう意味で、もう1回、今まで長い事作り上げてきた中間支援組織がですね、ここの中でまたテーブルに上げてもらってですね、オール対馬で皆が絡み合いながら進まないとですね、いつの間にか、また色んなスタートアップ企業も来られてですね、いろんな形で環境の方、水産の方、色々来るんで、どうしてこの長い間、有識者の人達が来てもらってプラットフォームを作ってCAPPAが出来たかという事は、この島内で、まず海ごみを解決する為にはこういうグループがいるんだと。だから必ずですね、今インゴットとかそっちの方にいってますけど、これも間違うかもわかりません。間違った時に誰かがですね、地元の人達もいて、有識者の先生方もいて、清野先生方もいて、色んな県とか市の方々もいらっしゃってですね。その時に、地先、地元ではこういう形をずっとやってきたんだ。これがもしかしたら良い形かもわからないという、もしかしたら。色んな意見があって、そっちも良いかもわからない。だからリサイクルを進みながら、今やっているこのスタディツアーも、この年表でもう1回まとまって、同じ方向を向いて進もうという、これが結んでやってきています。そやってきて、それが油化装置とか色んな事やってきたけど、やっぱり対馬も敗はしてきたんですよ。でもその中で、それを無駄にしていないこの組織と言いますか、こういうのをみんなで考えてやってきたんだっていう、この1つの羅針盤と言いますか、道しるべとして、過去を分かってもらって、今後未来にこの年表もまた繋げていきたいというのが1つの大きな目標でもあります。ありがとうございます。

清野委員長：ありがとうございます。本当にこの協議の場を持てるとか、色んな人が寄り合って話せるとか、とことん話すっていうのは、「こっぼうもん」とかいう時代からあるのかもしれないですし、対馬の海を伝って、色んな人が行き交った中で、色んな新しい考え方とか技術とか、人が来るとか、価値観違う人と一緒にやるとかいう中で出来た事だと思います。今ですね、上野さんがおっしゃっていただいたところ、ぜひちょっと次の協議会の時までには、色んな動きが今急激に起きていて、それをもう1回ちょっと整理して行って、それでどこが課題で、どこが可能か、少し出来ればですね、次回ぐらいに、羅針盤じゃないですけど、見取り図というか、何かそういう分布図じゃないですけど、そういうのも出来たら良いのかなと思いました。私の不手際でちょっと時間が伸びてしまいましたが、どうでしょう、オンラインの委員さんもいかがでしょうか。大丈夫ですか。そういたしましたら、また色々今回重要な資料、それから意見が出てきて参りましたし、次のフェーズに入っていく様な状況でございますので、オンラインの方も、お声だけじゃなくて、もしあれでしたらメールとかでもご意見をお寄せください。それではですね、私が担当さ

せていただいておりますところはこれで終わりにいたしまして、4番の全体を通しての質疑応答というの、年表の議論の中である程度消化したかなと思いますので、議事を事務局の方にお返しします。皆さん、ありがとうございました。

運営(福島)：清野委員長ありがとうございました。それでは、以上を持ちまして第2回対市海岸漂着物対策推進協議会を終了したいと思います。皆様、どうもお疲れ様でございました。